

論 文

# 現代日本人の非言語コミュニケーション に関する研究

—— ボディランゲージとジェスチャーに注目して ——

ルディン サリト

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

**要旨:** 言語は複雑なシステムであり、人間社会はその言語を用いて文化を構築している。つまり、言語は非常に重要な文化の一部であり、時代を通して進化し、それに伴ってコミュニケーションの方法も変化するといえるだろう。言語の中でも特に非言語コミュニケーションは、日常会話の中でも重要な役割を果たしている。人間は、意識的にも無意識的にも、言語では伝わらない想いや感情を、非言語コミュニケーションを通じて表現し、またそれを情報として読み取りながらコミュニケーションを行っている。近現代、日本の国際化がますます進行し、日本人と外国人との間で、また日本人同士においても、深刻なミスコミュニケーションを引き起こしていると考える。本稿では、現代日本人の非言語コミュニケーションについて調査し、先行研究との比較から、現代日本人の非言語コミュニケーションの傾向を述べる。そして、現代日本における非言語的コミュニケーションに変化があるかどうかを検討する。

**キーワード:** 非言語的コミュニケーション、ボディランゲージ、ジェスチャー、日本、文化

## Non-Verbal Communication in Contemporary Japan: Example Case of Body Language and Gestures

Ludin Sarit

Hiroshima University, Graduate School of Letters, Comparative Japanese Culture Department

**Abstract:** Language is a complex system being the pillar on which society leans on to create culture. It is an integral part of the cultural-social evolution that changes and evolves with time. Language is the main communication tool to pass information from different societies in order to exchange cultural ideas, political ideas etc. As such, nonverbal communication plays an important role in the everyday conversation, as it expresses the thoughts, points of view, feelings and other information that cannot be

transmitted by words. In consequence thereof, the nonverbal communication becomes an integral part of culture in certain societies.

Japan, a High-context culture society that relies on nonverbal communication to pass information, is becoming internationalized. This forces Japan to face with Low-context culture societies that rely on verbal communication as the main resource of transmitting information. The constant communication exchange of different languages leads the different cultural societies to depend mainly on nonverbal communication in order to transfer information that cannot be expressed by words. As a result, a change within the nonverbal communication style may be expected. This paper examines whether or not there is a change of the Japanese communication style from the body-language aspect. By comparing body-language communication style in modern Japan with previous researches results, the paper will outline the traits of Japanese body-language communication style and where changes may be found.

**Key words:** non-verbal communication, body language, gesture, Japan, culture

## 1. はじめに

近年日本への外国人渡航者や就労者の増加、および日本からの海外渡航者は増加している。つまり、日本人が外国人と直接コミュニケーションを行う機会が、国内外ともに年々増加しているといえる。こうした状況の中で、異文化間でのコミュニケーションをどのように円滑に進めていくのかということに関する研究も多くみられる。異文化コミュニケーションの分野では、「高コンテクスト」と「低コンテクスト」という枠組みを用いて文化を対比させ、その文化のコミュニケーション特性を定めようとする考え方があつた。この考えを提唱した Hall (1977) によると、各文化は「高コンテクスト」と「低コンテクスト」を両端とする軸上に配置することができ、そのコンテクストのレベル、およびその後の行動の基礎を理解するとコミュニケーションの図り方が決定づけられる。高コンテクストでは、多くの情報が身体的コンテクストかまたは個人に内在化されているため、ごくわずかな情報がコード化されて伝達される。一方、低コンテクストでは、多くの情報が明確にコード化されて伝達される。以上のことから、文化は行動（行動、マナー、エチケット、話し方など）の複雑なセットであるといえる。そして、コンテクストはコミュニケーションの重要なツールであり、伝達の基礎として相互作用の中でコンテクストを使用し、様々な形で言語を介して伝達される。高コンテクストな文化と、低コンテクストな文化では、コミュニケーションの際に用いられる言語的な情報量が異なってくることから、異なる文化間でのコミュニケー

ションを図る際には、それぞれのコンテキストやその高低を理解することが重要になってくるといえる (Hall, 1977)。この枠組みにおいて、しばしば高いコンテキストの文化の典型例とされるのが日本文化である。現代の日本においても、しばしば耳にする「空気を読む」という行為は、暗示的なコミュニケーションの代表格とされてきた (Hall 1993, 埴 2019)。つまり、日本では、詳細な言葉を用いたより直接的なコミュニケーションよりも、いかに少ない言葉でお互いの考えや思いを読み取り、伝え合うかというコミュニケーションが重要視される傾向にあるといえよう。実際に、Helmut (1973) は、日本の伝統文化や歴史的背景等を例に挙げながら、日本において非言語コミュニケーションが、社会的相互作用の中で非常に重要な役割を果たしていると述べている。また Taylor (1974) は、日本語を学ぶだけでなく、日本人の非言語コミュニケーションの動作を学ぶことによって、より理解が深められると述べている。したがって、異文化間でのコミュニケーションがますます盛んになっている現代において、より円滑なコミュニケーションを図っていくためにも、日本人の非言語コミュニケーションの特徴に着目し、理解を深めることが重要だと考える。非言語的コミュニケーションの特徴に注目するため、非言語的コミュニケーションの分類を理解しなければならないと考え、Duncan と Fiske (1977) は、米国人の対面での会話中に起こった、言葉によるコミュニケーションと非言語コミュニケーションに関する調査を行い、事例を記録した。そして、非言語コミュニケーションを、①キネシクスまたは目で見える行動、②パラ言語、③近接学、④嗅覚、⑤感触や温度といった肌の感受性、⑥化粧品や衣服といった人工物の使用、の6つに分類した。本稿では、非言語コミュニケーションのうち、①キネシクスまたは目で見える行動から、日本人の非言語コミュニケーションの特徴を明らかにしていく。まずは、日本人の非言語コミュニケーションに関する先行研究を概観し、日本において非言語コミュニケーションが重要視される背景にある歴史的側面や文化的特徴を示す。また、現代日本人の身体動作に関する実態調査を実施し、先行研究の結果と比較しながらその特徴やについて明らかにしていくことを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 日本の非言語コミュニケーションの歴史的社会的背景に関する先行研究

まず、日本が高コンテクストな文化といわれる背景について押さえておきたい。Helmut (1973) は、日本人の非言語コミュニケーション行動の特徴を、歴史的要因、社会的要因から捉えた。

#### 2.1.1 歴史的要因

Helmut (1973) は歴史的要因として、①人種的・文化的な均一性、②禅宗の影響、③1603年から1867年まで続いた徳川政権の影響の3つを挙げている。

①人種的・文化的な均一性：西暦500年以降、大陸からの他民族による大規模な移住を示す考古学的な痕跡が見られないことや、日本が遠隔島であることから、人種的均一性および文化的な均一性が図られた。これらの均一性は、様々な場面において良い対人理解を作り出し、多くの意図を円滑に伝えるための言葉を用いる必要がない。

②禅宗：禅宗の教示の場においては、静寂や意思、感性などを非言語的な手段によって伝えることが非常に重要視される。こうした禅宗の価値観は、鎌倉時代（1185-1333）に支配的階級であった武家が重用したことで、日本において多くの面で影響を与えた。今日の日本の伝統芸能（茶道、生花、弓道、書法など）においても、禅宗から受けた影響を見ることができる。これらの伝統芸能において、師匠は弟子に説明ではなく自らの所作の模範を見て真似るように指導し、弟子も師匠の所作を模倣し質問をしない。

③徳川時代：この時代に、政治的な制度が整えられ職業や身分が固定化し、文化や価値観も確立された。その中でも武士道に代表されるような価値観においても無言や静寂は美德とされた。そのような背景の中で言語は変化、もしくは非言語コミュニケーションに代替されていった。

#### 2.1.2 社会的要因

また、Helmut (1973) は社会的要因について、①序列と階級組織の重視、②母子間の関係性、③集団内の団結の3つを挙げている。①序列や階級組織の重視：日本語では敬語を用いて、対人関係の距離感や序列を非常に丁寧に表現する。Lewin (1969) は、西暦800年頃には敬語での表現がなされていたことを示す文献が存在していることから、序列や階級組織を重視することは

歴史的に受け継いできた固有の言語の構成要素であると述べている。

②母子間の関係性：Caudill&Weinstein (1969) は、日本人の母親とその生後3ヶ月の子供、および米国人の母子をそれぞれ30名ずつ調査し比較した。その結果、2グループ間に文化的な差異が見られた。具体的には、日本人母は声による相互作用よりも、身体的な接触をより多く用いて子供をあやす傾向が見られた。Wolff&Okada (1966) は、米国在住の日系3世の母子と、米国母子および日本母子の3グループを調査し、コミュニケーション文化の差異を述べた。そして、日本人の母子非言語コミュニケーションは、他の2つグループよりも文化的差異が強いと述べている。上記の結果から、非言語的コミュニケーションは子供が生後3ヶ月から始まり、この頃から非言語的コミュニケーションの文化差が見られることを指摘している。

③集団内の団結：Nakane (1970) は、日本人は自分が所属する集団外での人脈づくりが少ない代わりに、集団内の相互の関係において、自他への責任と期待がより強くなると指摘している。例えば、就職などで特定の集団に所属すると20代から退職するまでの間で、他の仲間の家庭生活や恋愛関係といったプライベートなことなどもより良く理解できるようになる。Nakane(1970) は、こうした対人関係の強い関わりが、日本人の繊細なマナー、語法、表情、姿勢の発達などに関連しているはずであると主張している。また、これらの方法の習得には訓練が必要であるが、多くの日本人は子供の頃から社会生活を通じて、その様な訓練を受けていると述べている。つまり、このNakane (1970) の主張を踏まえると、日本人のコミュニケーションを理解するにあたり言葉以外のコミュニケーション、特にジェスチャーを含めた身体動作に着目することが重要になってくるのではないだろうか。

## 2.2 動作学の先行研究

人間は意識であれ無意識であれ、非言語的コミュニケーションで自分の言葉で伝えられない思想を表す。一方、相手は自分の文化的社会的な話者の非言語コミュニケーションを翻訳する。その時に、ミスコミュニケーションが起こる可能性である。そのミスコミュニケーションを越えるために、動作学(キネシクス)が必要である。キネシクスは、Birdwhistell (1952) が提唱し、目視できる多種多様な行動を研究対象とする (Kendon, 1972a)。例えば、頭のジェスチャーと行動(頷く、頭の回し、指向、振るなど)や向き方、肩の

行動（すくめるなど）、目視できる感情表現、左右の手振り、左右の足脚の行動、姿勢とその変化、道具の使用がある（Duncan and Fiske, 1977）。Ekman & Frisen（1969）は、人間の身振りと動作を、語彙的動作（emblem）、例示的動作（illustrator）、調整的動作（regulator）、情動表出（affected display）、適応行動（adaptor）の5つの身振り（nonverbal Behavior）に分類した。Duncan（1969）は、特に上述の Birdwhistell（1952）、および Hall（1959）の研究に注目し、これらの先行研究で行われた対面でのインタビュー調査の重要性を述べている。さらに、非言語コミュニケーションの研究を2つに分けている。①身体動作そのものの構造を分析する構造的アプローチ：非言語コミュニケーションを、言語と同様に組織化された社会システムとみなして分析する方法である。②身体動作を外的な要因との関連づけて分析する外部変数からのアプローチ：特定の非言語行動の発生率を、個人の性格や相互作用を行う相手の反応などの様々な外部変数に関連づけ（Duncan&Fiske, 1977）分析する方法である。外部変数アプローチには、視覚的な相互作用に関する研究として、心理学的アプローチ（強化、規制、フィードバック、接近回避といった概念で特徴づけられ説明する）がある（Duncan, 1969）。

### 2.3 日本人の身振りに関する先行研究

Taylor（1974）は、日本語に対する理解を深めることを目的として、日本人の身体動作に着目した。日本人の身体動作の特徴を記録するために、ハワイ大学の日本人職員を集め、会議中という設定でロールプレイングに参加してもらった。そのロールプレイング中に起こるボディランゲージの行動を録画し分析に用いた。そして、この調査結果を Duncan（1969）の研究理念を考慮しながら分析し、日本人身体動作のリストを作成した。具体的には、A 顔の表情、B 目の動き、C 頭の動き、D 肩・胴の動作、E 手の動き、F 姿勢（静力学）、G 身振り（特定の語彙や思考を表す）、H その他、の8項目から構成されている。この論文が書かれたのは、1970年の日本でのジャンボジェット機就航の直後であり、近代日本の国際化の始まりともいえる時期に、日本人の身体動作を具体的に記録した資料として価値があると考えられる。

東山とローラ・フォード（2003）は日本人と米国人に調査を行い、その分析の結果から身振り・表情・しぐさをまとめ、辞典の形で「日米ボディートーク」を作成した。日本人には、イラストを用いてアンケート作成し、学生・

社会人100名に対し調査を実施した。また、米国人については、South Carolinaで30名の地域の人々に、基礎データとした映画の場面をビデオで見てもらった後に意見を聞き、分析に加えた。更に、日本人の身振りが英米の人々にどのように理解されるかについて、日本在住の英米人8名に詳細な記述式アンケートを実施した。この資料は、Taylor (1974) 以降の日本人の身体動作の資料として重要であり、2つの資料を比較することで、時代による身体動作の変化をみることができると推測される。

Taylor (1974) および東山とフォード (2003) の2つの研究以降、日本人の身体動作に関する調査は行われていない。

### 3. 資料収集・分析の方法と目的

「日本人同士や外国人とのコミュニケーション方法」に関するインタビューを行い、その対話中に起こる動作を録画によって記録し、分析を行った。調査は2018年9月から2019年3月に広島県内において実施した。対象者は20代前半（大学入学、又は社会に入る）から70年代（退職者）までの日本人大学生・大学職員（東広島キャンパス）と社会人（広島市内）、106名であった。資料収集方法は録音、録画と筆記による記録である。研究に参加する前に、筆者は各対象者に研究内容、資料収集と分析を詳しく説明した。筆者の説明に同意した対象者には、「同意書」に署名してもらった。本研究には同意の得られた対象者のデータのみを使用している。対象者の個人情報を守るため対象者の写真を図に変更し、発話文に関するの図を付けた。調査で観察されたジェスチャーの事例と Taylor (1974) の「Japanese kinesics」での記述を比較し、現代日本人のキネシクスの実態把握と変化を明らかにする。分析の際、東山とフォード (2003) の「日米ボディートーク」も参考にした。

例えば、図1では、話している際の対象者の視線はインタビュアーの方を向いてはいるが、下がっている。これは Taylor (1974) の記述と近似している。座位姿勢については後述する。



図1 視線を下げる

## 4. 調査の結果

本稿では紙面の都合により、ジェスチャーと身体行動として明確に観察されたものを事例として取り上げる。事例では、Taylor (1974) および東山・フォード (2003) の記述を「」で示す。また、対象者の個人情報保護のため、インタビューの録画を絵に変換し、図として提示する。

### 4.1 顔の表情

#### 4.1.1 眉毛と額およびアイコンタクト

眉毛と額とアイコンタクトについて、Taylor (1974) の記述では、「一般的に眉毛と額がほとんど動かない。疑問がある時、驚く時及び不満がある時には当てはまらない」。「フォーマルな場合、例えば会議、面接などでは、アイコンタクトを避ける。アイコンタクトをしても直ぐに視線をそらす。インフォーマルな場合、例えば友達と会うなどでは、アイコンタクトを避けない」とある。



図2 眉毛と額の行為およびアイコンタクト

図2では、インタビュアーから質問を提示された際に見られた動作で、対象者の眉毛と額は中央に向かって、しわを寄せるように動いている。同時に、対象者はインタビュアーに視線を合わせて質問内容を聞いている。眉毛と額の動きは Taylor (1974) の記述と同様である。具体的にインタビュアーの質問に対して疑問を持ちながら聞いていることが伝わる。一方、インタビューというフォーマルな場合ではあるが、聞き手はアイコンタクトをとっている。これは Taylor (1974) の記述とは相違がある。



図3 視線を合わせる

図3では、聞き手の視線は話者（真ん中に座る日本の男



性)に向かっている。一方、話者の視線は、インタビュアー（欧米人女性）に向けられている。聞き手の視線について、Taylor (1974) の記述では、フォーマルな場合で、日本人の視線は下がる傾向にあると書かれているが、この事例を見るとこれは当てはまらない。ここでも話者のアイコンタクトは Taylor (1974) の記述と相違がある。またこの他にも Taylor (1974) の記述では、「フォーマルな状況では、視線を合わせることよりも視線を下げることを好む。その際、視線を下げる行為は質問があることを示していると思われる」とある。

## 4.2 手振り（手の動き方）

### 4.2.1 人差し指

人差し指の動きについて、Taylor (1974) の記述では、「人差し指は、物を指す時のみに使われる。他者を指す際は掌を広げて、相手の方に向ける」とある。

図4は、話し手の女性は目的地への行き方を聞かれて次のように答えた「自分も道のこと聞かれて「そこ」と言いたいけど結局伝えられず一緒に言ったりとか…「こ こ、ここ」みたいな感じで」と話しながら、男性の向こうに人差し指で指し



図4 人差し指を使った動作

示し見られるが、実際は「向こう」へ指す。これは Taylor (1974) の記述とは相違が見られない。この人差し指で他者を指す行為について、東山・フォード (2003) の「日米ボディートーク」ではほとんどの日本人が日常的に行っている（よく使うが32%、時々使う53%）ことが示されている。

### 4.2.2 「私（自分）」や「他者」を示す手の動き

「私（自分）」を示す際の手の動きについて、Taylor (1974) の記述では、「日本人は「私」を示したい時に、人差し指を自分の鼻先に指す。女性の場合、鼻に沿うように顎か首に人差し指を向ける。」とある。

図5で、対象者の女性が「英語を…私が話せる言語は英語だけなの」と発言した際に見られた動作である。左腕を体の近くに寄せて、手のひらを胸に置いて。この事例と Taylor (1974) の記述では、「自分」を示す動作に大きな相違が見られた。

図6は、話者が「道を聞かれたときに」と発言した際に見られた手の動きである。左腕を自分に向けて、手のひらを開いた状態で肩に置いている。この動作について東山とフォード (2003) によって、「日本人男性 (74%) は「自分」を示したい時に、片手を軽く握り、親指を立てて、自分の肩越しに後方を指し示す」とある。

時々使う人は56%。使わない人は37%であり、「大人の男性、特に若者が良く使う。インフォーマルな動作である」とある。一方、「片腕を頭の高さくらいに上げて、手のひらを上にして声を掛ける」とある。図6の対象者の動作を見ると、英米人の動作に近似していると思われる。

図7は、話し手が「そっち(そちら)から」と話しながら示す際の腕の動きである。この場合の「そっち」とは、第三者を示している。左腕をテーブルに置きながら、手のひらを曲げて自分の肩に近づけている。東山とフォード (2003) によって、「片方の人差し指を近くし示すもののほうに向け、他の指は軽く握る」とある。日本人の男女とも、よく使うが32%、時々使う方が53%とある。一方、英米人の場合、「第三者を指し示すなど、形式的な場で使うのは片手全体で指し示す方が礼儀にかなった動作とされる」とある。

図6と図7の動作事例は Taylor (1974) の記述では見られない動作であるが、東山とフォード (2003) の研究調査にも見られる動作であり、時代と共に動作が変化したことが伺



図5 「自分」を示す手の動作



図6 「私に」を示す手の動作



図7 「そっちから」を示す手の動作

える。また、上記の2つの事例の動作は、米国人の動作と一致している。

#### 4.2.3 その他の手の動き

また、他の手の動きに関して、Taylor (1974) の記述に、「話す時に強調や説明したい時には、手の動きはあまり使わない。但し、人差し指で掌に漢字を書く動作を除く」とある。図8は、対象者が‘分ける’と発言した際に見られた両手の動作である。両手の肘を曲げながらテーブル上に置き、両手のてのひらを下に向けながら、外側に両手を離すように動かしている。これは、Taylor (1974) の記述とは相違がみられる。



図8 ‘分ける’を意味する手の動作

一方、東山とフォード (2003) の「日米ボディートーク」ではこの動作についての言及はない。上記の図6から図8で見られた動きの事例から、Taylor (1974) の調査および東山とフォード (2003) の調査の頃と比較すると、現代日本人の手の動きということが推測される。

### 4.3 座位姿勢

Taylor (1974) の記述では、「日本人の座位姿勢は一定的な姿勢である。一定の姿勢では、肩が背もたれより遠い、直立の座り方である (フォーマル)。一方で、無意識的に肩は丸くて、背中は直立しない、この行動はリラックスやインフォーマルな状態を表す。」「笑顔および表情が伏し目がちに变化することは、恥ずかしさを感じていることを表している。」とある。

東山とフォード (2003) の記述では、日本人の座位姿勢は2つ挙げられている。1つ目は、両膝に手を置きながら椅子に腰かける姿勢 (「椅子に腰かける (両手にひざ)」。具体的に「椅子に腰かけ、姿勢を正し、左右の手をそれぞれ膝に乗せる。この姿勢は緊張感、かしこまっている、多少の不安感、礼儀正しさを表現、相手への敬意、一生懸命さを示す」とある。男女ともよく使い (65%)、特に大人がよく使う姿勢である (71%)。2つ目は手先と足先を揃えて椅子に腰かける姿勢 (「椅子に腰かける (手先、足先を揃える)」) である。具体的に、「姿勢を正して椅子に腰かけ、両足のひざ頭をそろえ、足先

もそろえる。両手は手先をそろえて組み合わせ、ひざに置く。これは緊張、かしまった態度、礼儀正しい、謙虚、上品、真刺な態度を表す」とある。こちらの姿勢は男女ともにあまり使われない(55%)が、どちらかと言うと女性がよく使う姿勢である(72%)。英米人がこの姿勢を見た場合「不安や恐れを表している、叱られているように見える、地位の上の者の前で神経質になっている」と考えるという記述もある。

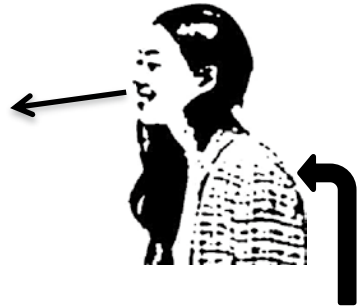


図9 座位姿勢の動作

図9は、対象者がインタビュアーの話を受けている際、座位姿勢である。肩は丸くなっていると同時に、笑顔で伏し目がちである。この姿勢と表情はTaylor (1974) の記述と同様である。これらの動作によって、対象者の緊張感やインタビュアーへの気恥ずかしさが表されていると解釈できる。東山・フォード(2003)の記述の2つの座位姿勢は、手は膝に置かれると示されている。しかしながら、今回の調査では観察記録されたのはテーブルよりの上の動作や姿勢のみだったため、図10の対象者のようにテーブルの下に手が置かれている場合、膝に手をのせているかどうかについては確認できなかった。

図10は、女性の対象者が話を聞きながら手で髪を触っている動作である。そのため、両手はテーブルの上であり、明らかに膝の上にはのっていない。また、図10の対象者の座位姿勢と同様に肩は丸くなっている。表情は伏し目がちで笑顔である。



図10 座位姿勢と髪を触る動作

2つの先行研究には、髪を触りながら話すなどのしぐさの記述はなかった。しかし、この動作はEkmanとFriesen(1969)の身振りの機能のうち「状況適応動作(adapters)」に当てはまると考えられる。この動作は自己の内面を整えようとする無意識的に行っている身振りである。髪を触るなどの他に、机を指先で叩いたり、足を小刻みに上下に動かすなどの

動作がこれに当たる。したがって、髪を触りながら話すというしぐさは、インタビューを受けるという形式的な状況下に置かれ、対象者が緊張感を持っていることを示していると推測される。この対象者の髪を触る行動は、聞き手である時に多く見られ、自ら話し手となる場合には見られなかった。一方で、一貫してリラックスしていること示す座位姿勢（肩は丸い、両肩が縮こまっていない）であった。このとき、対象者の友人とともに参加していたが、そのことでインタビューへの緊張感が軽減され、比較的にリラックスして臨んでいることが影響していると考えられる。

#### 4.4 お辞儀の際の肩と胴の動き

Taylor (1974) の記述では、「お辞儀は、様々な角度、持続、様式が見られる。それぞれのお辞儀は違う意味をもつことがある」とある。

図11ではインタビューアが調査の終了を告げた時に見られた行動である。対象者同士が‘お疲れさま’

と言いながら、お辞儀している。女性の対象者は、肩を丸めた姿勢で頭と視線を下に向けている。男性の対象者は、背中がまっすぐのびている姿勢であり、頭を下に曲げている。

東山とフォード (2003) のお辞儀の記述では、「両手を体の前でそろえ、身体を前方に曲げ深く頭を下げる。これは挨拶、相手への敬意、丁寧な依頼、かしまる、目上の人に対する謙遜、謝罪を示す」とある。男女ともに使う(67%)。

Taylor (1974) および東山とフォード (2003) の記述でも、日本人は形式的な場面でこのジェスチャーを使うことが挙げられており、現在の日本人も同様の行動を行っている。



図11 お辞儀

#### 4.5 考察

現代日本人のキネシクスに関する観察調査結果からフォーマルな動作（例えば、お辞儀など）はほとんど変化がみられなかった。一方で、無意識に行われる手の動作については、これまでの先行研究では見られなかった動作も確認された（例えば、「私（自分）」を動作で示す際に、腕を体に寄せ掌を胸に置く。髪を触りながら話すなど）。本調査で見られたこれらの動作は、英米人のキネシクスに近似しているものが複数見られた。それは、2008年、又は2013年以降の在日本の外国人数がピークとなったことで、日本人は外国人と接し、直接外国人とコミュニケーションを取る機会も増えたことが考えられる。しかし、これらの動作の変化や増加は認められない。英語が堪能な日本人ばかりでなく、苦手な日本人もコミュニケーションを取らなくてはならない。そのような状況で意図的もしくは無意図的に伝えたい内容を補おうとする傾向が高まるとともに、外国人にも見てわかる動作を用いようと試みる機会が多くなっていると推測される。

#### 5. おわりに

本稿では日本人に対するインタビュー調査を行い、その際に起こった動作を分析した。本稿の事例から見られた動作を1970年代と2000年代に行われた先行研究と比較し、日本人のキネシクスの変化の有無を述べた。

NHK 放送文化研究所が1973年から4年ごとに行っている「日本人の意識」調査によると、入国外国人は1980年から1990年までの10年間で年間130万人から350万人に増加した。同じ期間、出国日本人も391万人から1,100万人になっており80年代後半に大きく増えている（p. 109; 附録 III 37）。つまり、日本人は外国人と直接に接する機会が増え、コミュニケーションの場面も多くなっている。国際言語である英語を母語としない日本人にとって外国人とのコミュニケーションにおいて非言語コミュニケーションを用いることは円滑な意思疎通に欠かすことができない。従って、無意識に外国人が用いているジェスチャーや外国人にも伝わるジェスチャーを用いていると推測される。それらが日本人の日常的な非言語コミュニケーションにも用いられるようになり本稿の事例のような結果が見られたのではないだろうか。

急速なグローバル化に伴うコミュニケーションの変化によって、一層、日本の国内においても、異文化間においても、ミスコミュニケーションが深刻

化していくことが懸念される。したがって、現代日本人のコミュニケーションに関する意識を明らかにし、コミュニケーションに影響しているかというアプローチによって、より多角的に非言語コミュニケーションの変化を明らかにすることにも意義があると考えられる。

## 謝 辞

本研究に速く快く協力して下さった広島大学と大学周辺の全参加者に心から感謝いたします。

## 【参考文献】

- Allot, R. (1999). Evolution and Culture: The Missing Link. In J.M.G van der Dennen, D. Smillie and D.R. Wilson (Eds.), *The Darwinian Heritage and Sociobiology* 5: 67-81.
- Barnaouw, D.C. (Ed.). (1989) *International Encyclopedia of communication* (vol. 2). Ny:Oxford University Press.
- Duncan, S. (1969). Nonverbal Communication. *Psychological Bulletin* 72 (2): 118-137.
- Duncan, S. and D. W. Fiske (1977) *Face-to-Face Interaction*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Hillsdale: New Jersey.
- Ekman, P. & Friesen (1969) The repertire of nonverbal behavior: categories, originans, usage and coding. *Semiotica* 1.
- Hall, E. T. (1959) *The Silent Language*. Garden City. New York: Anchor Press/Double Day.
- Hall, E. T. (1966) *The Hidden Dimension: Man's Use of Space in Public and Private*. Doubleday and Co., Inc., New York.
- Hall, E. T. (1976) *Beyond Culture*. Garden City. New York: Anchor Press/Double Day.
- Hall, E. T. (1987) *Hidden Differences*. Garden City. New York: Anchor Press/Double Day.
- Helmut, M. (1973). Aspects of Nonverbal Communication in Japan. *The Journal of Nervous and Mental Disease* 157 (4): 262-277.
- Jolly, S. (2000). Understanding Body Language: Birdwhistell's Theory of Kinesics. *Corporate Communication An International Journal*: 1-9.
- McDaniel, E. R. (1993). Japanese Nonverbal Communication: A Review and Critique of Literature. *The Annual Meeting of the Speech Communication Association* (79): 1-33.
- McDaniel, E. R. (2006). Japanese Nonverbal Communication: A Reflection of Cultural Themes. In L. A. Samovar (Eds.), *Intercultural Communication*: 266-274. Thomson.
- McNiell, D. & Pedelty, L. L. (1995) Right brain and gesture. K. Emmorey & J. S. Reilly (Eds.), *Language, gesture and space*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates .

- Taylor, H. M. (1974). Japanese Kineiscs. *The Journal of the Association of Teachers of Japanese* 9(1): 65-75.
- Touaoula, Z. (2017). *Nonverbal Communication and Cultural Differences*. Universite Abdelhamid Ibn Badis. Mostaganem: 1-34. Algeria.
- 東山安子・ローラ・フォード. (2003). 『日米ボディートーク 身振り・表情・しぐさの辞典』増補新装版 (2016). 三省堂書店
- NHK 放送文化研究所 (2015). 『現代日本人の意識構造』. NHK 出版